英語教育と文学的教材［10］†

― 映像を活用した英語教育 ―

小澤　浩美*・幡山　秀明**
那須烏山市立烏山中学校（宇都宮大学大学院）*
宇都宮大学教育学部**

補助教材としての映像ソフトの実用性は高い。中でも映像の魅力が最大限に生かされているのは、映画であろう。本稿ではまず、David John Wood の *Film Communication Theory and Practice in Teaching English as a Foreign Language* をもとに、EFL 環境における教材としての映画について考察する。次に、効果的な教材になりうる映画を授業で活用するために、「検定教科書に採用されている映画教材」について考えてみたい。

キーワード：　視聴覚教育　中学校教育　カリキュラム　映画教材　教科書　教員養成

１．補助教材としての映像ソフトの利用

年度末になると、次年度に使用したい補助教材や教具、機器等の購入希望調査がある。教科書会社の教材総合目録等を見ると、ピクチャーカードや指導用 CD と並んで、教科書の内容に準拠した映像を見ることができる DVD を販売する会社もいくつかある。筆者が初めて映像教材の購入希望を出したのは、１９９３年度版の教科書が使用開始になる時だった。１５年以上前のことであり、もちろんその時には DVD ではなく、ビデオソフトとして発売されていた。一巻１万７千円以上する代物を１０本近く。それを３学年分。ケースの裏側に書いてある値段を見て生徒が驚いていた。思えばよく購入を許可してもらえたものだ。以来、授業では毎回のようにビデオソフトの映像を使用したし、教科書が改訂になってからも使い方を変えて旧版も活用したので、しっかりもとはとったと自負している。

当時は英語科の教員として採用されてから数年がたった頃で、生徒を飽きさせずに授業に取り組ませたいと試行錯誤の毎日だった。「言葉の習得はまず耳から」とは言うが、情報を得るときには聴覚のみではなく、使える感覚はすべて使って情報を得るのが自然であり、視覚にも訴えながらできるだけ自然な形で新しい言語材料を導入したいと考えていた。ピクチャーカードの使用だけでは不足を感じていたところ、目にとまったのが教科書準拠の映像ソフトであった。映像ソフトは、自然な会話の流れにするために教科書の本文以外のせりふが付け加えられていたり、教科書の内容を補足して学びを深めるような資料映像が付いていたり、となかなかの充実ぶりである。語彙や英文の量に制限がある中学生用の教科書には、あまり複雑な内容を載せることはできないが、当時使用していた教科書を改めて見直してみると、身近な学校生活の話題はもちろん、実際にはなかなか足を運べない海外の話題や生徒の興味を引きそうな音楽の話題などが盛り込まれていた。それまでピクチャーカードを使っていた教科書本文の導入や異文化に関する説明も、映像ソフトを使用することで、よりわかりやすくできるようになった。現行の三省堂 *New Crown* から例をあげてみよう。３年生の Lesson 6 は Martin Luther King Jr.と彼を中心としたアメリカ合衆国の公民権運動を扱った題材であるが、教科書準拠の DVD には当時の映像が織り交ぜられていたり、有名な“I Have a Dream”スピーチの主要な部分がコンパクトに収められていたりして、授業の流れの中で使いやすい。

---

† Hiromi OZAWA*, Hideaki HATAYAMA** : English Education & Literature as Teaching Materials [10]
* Karasuyama Junior High School
** Faculty of Education, Utsunomiya University

時には出演者の演技力の問題や、資料映像の充実度の低さに不満を覚えることもあったが、補助教材としての映像ソフトの実用性は高い。教科書が改訂になる時には必ず購入を希望し、おおいに活用している。ソフトの値段も当時と比較すればずいぶん安くなった。

2．学習教材としての映画

映像の魅力が最大限に生かされているのは、なんと言っても映画であろう。一流の監督と役者、そして大勢のスタッフと多額の資金を投入し、優れた作品を世に送ろうと力を込めて創造したものに魅力がないはずはない。学習教材としての映画の利用方法も多く考案されている。英語教育関係の出版物には「映画を活用した授業」をテーマにしたものが見られるし、雑誌にも特集が組まれることがある。最近では2008年2月号の『新英語教育』が「映画で学ぶ息づく言葉」、2007年11月号の『英語教育』が「映画で英語～授業で使える映画・教師が愉しめる映画～」という巻頭特集を組んでいて興味深い。

本稿ではまず、David John Wood の *Film Communication Theory and Practice English as a Foreign Language* をもとに、EFL 環境における教材としての映画について考察する。この本は1995年に出版されたもので、映像機器や映像ソフトが十数年の間に急速に進化したため時代に合わない記述もあるが、学習教材として映画を活用するにあたっての理論的な根拠や、注意しなければならないことは時代にかかわらず、共通している。

> This present study examines the combination of the most motivating audio-visual resource, the movie, and one of the most effective language-teaching methodologies, the communicative approach. (vii)

Wood は序文でこのように述べ、日本の英語教育においても注目されているコミュニカティブ・アプローチ（または CLT）と、学習の動機付けとして高い効果をもっている映画との融合について検証するとしている。CLT はコミュニケーション能力の養成を中心目標にした教授法の総称であり、その特徴の一つとしてオーセンティック教材の積極的使用があげられている（白畑 65）。さらに、Wood は「動機付け」に関する調査について次のように述べている。

> Surveys of motivation (such as Kirk 1992) indicate that movies encourage learners to study twice as much as ordinary texts, and nearly as much as teachers, with positive responses being 70%, 35% and 85% respectively. (4-5)

視覚・聴覚を中心に様々な効果的な要素をもつ映画の「動機付け」としての効用は非常に高いという結果が出ているが、同時に忘れてはならないことも示されている。教師自身の存在(ここで言われているのはネイティブ・スピーカーの教師である)が「動機付け」として最も効果的なのであって、いくらすばらしい映画でも、あくまでも疑似体験にしかならないということである。

また、カリキュラム上の問題も重大である。授業は年間計画に沿って行われており、どんなに魅力的な教材であろうとそればかりに時間を費やすわけにはいかない。しかし Wood は、映像を見せるだけでそれに関連する活動がないという状況はめずらしくないと指摘する。

> Although, in itself, such an approach [using audio-visuals with no further related activity] may not necessarily be especially damaging or beneficial, it raises the outcry of "electronic baby-sitter" (Uehara 1989). Some teachers justify showing movies as entertainment, pointing to the potential follow-up stimulus for study, and even coining the related term, "edutainment" (for example, Berman1990). (6)

映画に限らず、学校教育で映像が使われる機会は年々増えていると思われる。その際はカリキュラム上の位置づけを行い、どんな性質のものとして使用するのかという定義づけを忘れてはならない。

次に、EFL環境における言語学習教材としての映画使用の適切性について確認したい。Wood はこのことについて、1)memorability 2)control 3)motivation 4)communication 5)compassion の5つの特徴をあげている(12)。以下に簡単にまとめる。

1) memorability　興味深い内容や意味のある文脈は記憶に残りやすいし、生徒の言語スキルの向上に資する。
2) control　繰り返しが不可能な現実世界の言語使用場面と異なり、何度でも再生可能である。個人での学習にも向いている。
3) motivation　視聴者は、次に何が起こるか知りたくてたまらず、想像力と興味関心をかきたてる。
4) communication　比較的自然な言語の使用場面が具現化され、聴覚と同時に視覚化できる。

5) compassion　言語習得のみならず、映画から得た感動は、それと意識せぬうちに洞察力(insight)の獲得も促進する。(insight については「英語教育と文学的教材[2]に述べられている。)

ここでは特に 4) communication に注目したい。中学校学習指導要領では、平成元年告示の旧版から「コミュニケーション」という文言がキーワードとなった。現行版からは「言語活動の取扱い」という項立てで、3学年間を通した配慮事項を記載している。その中に「言語活動を行うに当たり、主として次に示すような言語の使用場面や言語の働きを取り上げるようにすること。」とあり、〔言語の使用場面の例〕として、「あいさつ」「買い物」「家庭での生活」「学校での学習や活動」などがあげられている。これはすでに告示された新学習指導要領にも引き継がれている。〔言語の働きの例〕としては「意見を言う」「約束する」「苦情を言う」などがあげられているが、これについては、新学習指導要領では新たに5つの働きに整理しなおされ、それぞれに代表例が示されている。5つの働きのうち「コミュニケーションを円滑にする」という働きは、新たに付け加えられたものである。

いくら文法的に正しい英語でも、場面や状況に応じて適切な表現ができなければ、コミュニケーションがとれたことにはならない。映画は、ストーリーの展開を追いながら、生き生きとした〔言語の使用場面〕や〔言語の働き〕に触れることができる。時には登場人物に感情移入し、その場面を疑似体験することにもなる。Wood の次の言葉は、まさにこのことを言い当てている。

> ...they [video movies] offer a linguistically valuable alternative to living in a full-time English environment. They make it easier to imagine the context of living English than printed text, pictures or audio tape alone, because of their dynamic potential fusion of three communication modes — the vocal, visual and verbal. (14)

映画は、活用の仕方によってはコミュニケーション能力を伸ばすための教材として大変有効に働くことが期待できるのである。

3．検定教科書に採用された映画

これまで述べたように、映画は効果的な学習教材となる可能性を秘めている。授業での活用についての実践研究は多く見られるし、「映画は理想的な英語の教材になる」として発足した映画英語教育学会 (ATEM) も、2009年には第15回大会を迎える。授業実践の事例として、前述の『英語教育』2007年11月号から、「特集・映画で英語」に掲載されたものの一部をあげてみよう。

- 『ミセス・ダウト』で when と where を導入
- 『ロボッツ』でダイアログ練習
- 『アンネの日記』で英作文指導
- 『ハリー・ポッター』『ホーム・アローン』でリスニング
- 『マトリックス』で異文化理解
- 『インディー・ジョーンズ魔宮の伝説』でインドや中国アクセントの英語に触れる

中・高・大の教員達が教材研究を重ね、実践してきた授業の数々が紹介されている。さらに資料として、授業で使える映画が場面別に紹介されている。「挨拶する場面」、「言い訳をする場面」、「怒りと謝罪の場面」、さらには「銀行口座を開設する場面」までが取り上げられている。「言語の使用場面や働きを取り上げる」とした学習指導要領を意識してのことだろう。それぞれがすばらしい実践であり、教員である読者が参考にして実際に試してみることができるように、指導案やワークシートの一部も掲載されている。

教師が目の前の生徒の実態に合わせて教材研究を行い、「これを身につけてほしい」という情熱をもって授業にあたる。理想の姿であり実際にそうありたいと思う。効果的な学習教材である映画を使った実践が広がるのは望ましいことであるが、授業時数にゆとりはなく、教科書以外の教材を授業に取り入れることは難しいと感じている教員も多いのではないだろうか。映画の選定や授業での活用の仕方は様々な先行実践を参考にできるとしても、年間指導計画にそって授業を進めていく上では、投げ込み教材的な扱いになってしまう場合もあるだろう。教師の個性が表れ、生徒の実態にも合わせられるという長所はあるが、準備に時間がかかるのは否めない。

注目すべき調査結果がある。Benesse の第4回学習指導基本調査(調査時期:2007年8月～9月)の中の一項目である。この調査は、全国の公立小学校1，872名、公立中学校2，109名の教員の回答による。第9章・第2節「教員の悩み」という項目を見てみると、小・中学校ともに「教材準備の時間が十分にとれない」ことが第1位としてあがっている(小学校90．7%、中学校83．3%)。「作成しなければならない事務書類が多い」「休日出勤や残業が多い」という項目が、小・中ともに2位、3位を占めており、教員が日々の忙しさに悩みを感じていることがよくわかる。このような状況では、教材研究や

準備に時間をかけ、教科書以外の教材を使って充実した授業を展開することは難しいのではないだろうか。

そこで、効果的な教材になりうる映画を授業で活用するために、「検定教科書に採用されている映画教材」について考えてみたい。学校教育法第34条に「小学校においては、文部科学大臣の検定を経た教科用図書又は文部科学省が著作の名義を有する教科用図書を使用しなければならない」と定められており、この規定は、中学校、高等学校、中等教育学校等にも準用されている。すべての児童生徒が教科の主たる教材としての教科書を用いて学習する必要があるのである。教師の教え方や指導技術の差はあっても、教科書は全ての生徒が目にするものと考えてよい。

ここでは中学校を中心に考え、以下に教科書に採用された映画教材をあげてみる。

昭和５９（１９８４）年度版

Total	3年	*Romeo and Juliet*
Everyday	2年	*She Was Like a Little Chrysanthemum.*[1]

昭和６２（１９８７）年度版

Sunshine	2年	*A Girl and the Jungle (Miracles Still Happen)*
Total	2年	*Romeo and Juliet*
Everyday	3年	*Running Brave*

平成２（１９９０）年度版

Sunshine	2年	*A Girl and the Jungle (Miracles Still Happen)*

平成５（１９９３）年度版

New Horizon	3年	*Limelight*
Sunshine	3年	*Something for Joey*
Total	2年	*Anne of Green Gables*
Total	3年	*Romeo and Juliet*
Everyday	2年	*Kiki's Delivery Service*[2]

平成９（１９９７）年度版

New Crown	3年	*Free Willy*
Sunshine	3年	*Something for Joey*
One World	3年	*The Sound of Music*[3]
Total	3年	*E.T.*
Everyday	2年	*Kiki's Delivery Service*[2]

平成１４年（２００２）年度版

Hew Horizon	2年	*E.T.*
New Crown	3年	*Fly Away Home*
Sunshine	3年	*Something for Joey*
One World	3年	*Stand By Me*
Total	2年	*Fly Away Home*
Total	3年	*E.T.*

平成１８年（２００６）年度版

New Crown	3年	*The Whale Rider*[4]
Sunshine	1年	*Whale Rider*[5]
Sunshine	2年	*Maria Talks about Her Life (The Sound of Music)*
One World	3年	*Rocket Boys (October Sky)*
Total	3年	*October Sky*

ここには「教科書に映画の画像が載っているもの」を基本に映画教材をリストアップした。1)は、伊藤左千夫の「野菊の墓」のストーリーを易しい英語に書き直したものである。アイドルとして人気のあった松田聖子主演で１９８１年に映画化された時の写真が４枚掲載されている。中学生の興味関心に沿いながら名作に英語で触れさせる意図だろう。英語版の映画が見あたらないので、映画を使った英語の授業を展開するのは難しいかもしれない。１９９３年度版と１９９７年度版に掲載の2)は童話作家・角野栄子の『魔女の宅急便』を原作としている。『魔女の宅急便』は１９８９年にスタジオジブリがアニメーション映画化しており、*Kiki's Delivery Service* という教科書版と同タイトルの英語版の映画もある（教科書には映画版の写真はない）。教科書に掲載されている主なエピソードは映画版には出てこないが、冒頭の主人公が新しい町に住み始める部分は映画版を併用することも可能なのでリストに入れた。3)は、映画そのものの写真は掲載されていないが、*The Sound of Music* はよく知られた映画作品であり、他社でも映画版が紹介されているので掲載した。4)5)は同じ作品を扱っていると言えるが、原作は4)のように定冠詞付きのタイトルで、他方映画版は5)のように定冠詞なしのタイトルになっている。5)の *Sunshine* 版は映画版を出典としていると明記しているが、映画の画像写真は掲載されていない。

リストには入れなかったが、文学作品としての方がよく知られており、映画版も存在するものもある（*The Adventures of Tom Sawyer* や"The Last Leaf"は一時期さかんに教科書に採用されていた）。また、ストーリーを追う形ではないが、簡単に紹介されている映画もある。（*Harry Potter, Star Wars, Spirited Away,*『千と千尋の神隠し』など）全体的に見て、教科書に取り上げられる映画教材は増加傾向にあることがわかった。中学校学習指導要領にお

いて「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成」が明記され１９９３（平成５）年度に改訂された教科書から、その傾向は顕著である。

映画を授業で使う場合には、取り上げる作品の選定が重要である。暴力や性表現、卑語の使用等にも注意しなければならない。検定教科書は、多くの執筆者・編集者が関わり、中学生の発達段階を考慮して作られている。主要な登場人物の年齢が中学生に近いものも多く、共感をもって学習できるという点でも優れており、映画本編を授業に使用するのにふさわしい作品がそろっている。

それでは、教科書に掲載されている映画教材を、生徒はどのように受け止めているのだろうか。筆者は２００８年度の前期に「英語教科書で印象に残っている題材」を調査するアンケートを行った。宇都宮市内の高校１年生２６９名と、宇都宮大学の学生（１～４年及び科目履修生）９８名に協力を仰いだ。「マザー・テレサの活動を取り上げたもの」や、「オーストラリアの先住民であるキャシー・フリーマンのオリンピックでの活躍とアボリジニの文化を扱ったもの」、「原子爆弾の被害にあった少女の物語」等が強く印象に残っているという結果であった。自由記述で書かれた「印象に残っている理由」からは、充実した題材内容とともに教員が力を入れて教材研究をしたことがその要因であることが読み取れた。

他方、映画教材はというと、印象に残ったとしている学生・生徒はほとんどいなかった。前述のように、Wood は EFL 環境における言語学習教材としての映画使用の適切性について 1) memorability 2)control 3)motivation 4)communication 5)compassion の5つの特徴をあげているが、この調査の結果からはそれらの特徴が見て取れない。映画を題材にした作品のみならず、文学的要素の強い作品は、通常のレッスンではなくリーディング用や付録の読み物教材として掲載されている場合が多い。通常のレッスンよりも軽い扱いをされたり、場合によっては授業で取り扱わなかったりということもあるようだ。しかし、大学生で5名映画教材をあげている者がおり、そのうちの4名は印象に残った理由として「授業あるいは個人で映画の本編を見た。」としている。あとの1名は「映画のシナリオを読んでいるようでおもしろかった。」と書いている。やはり、映画教材が本来もっている効果を発揮するためには映像の力が欠かせない。教科書に掲載されている作品は教師用の解説書や教科書会社のインターネットサイトからも補助資料を得やすいので、もっとていねいに授業で扱うことは可能である。

３．“The Whale Rider”

ここで、現行の *New Crown*（三省堂）３年生用と *Sunshine*（開隆堂）１年生用に採用されている“The Whale Rider”（*Sunshine* では“Whale Rider”）を取り上げて、映画を使った英語教育の今後の展望について述べてみたい。教科書のストーリーは、ニュージーランドの先住民族マオリの作家ウィティ・イヒマエラ(Witi Ihimaera)の原作をもとに作られている。映画版の *Whale Rider*（邦題『クジラの島の少女』）は、原作者と同じくマオリの血を引くニキ・カーロ(Niki Caro)監督のもとに撮影され、２００２年に公開された。トロント国際映画祭、サンダンス映画祭、ロッテルダム映画祭と、世界の映画祭で観客賞を独占した作品である。

クジラに乗ってやってきた神秘的な勇者伝説を信じるマオリ族の一家に生まれた主人公の少女カフ(映画ではパイケア）。族長である曾祖父コロ・アピラナ（教科書では祖父になっている）はカフを心から愛しながらも「後継者は男でなければならない」として頑なに彼女を拒む。カフは孤独と戦いながらもけなげにコロを敬愛し続ける。村の少年たちが誰も成功しなかった後継者になるための課題をカフが苦もなくやり遂げたことをコロが知ったのは、カフがクジラを救うために海に消えた後だった。３日後に発見されたカフが病室で目覚めると、コロは初めてカフへの愛情を吐露する。

> “You're the best great-grandchild in the whole wide world,” he said, “Boy or girl, it doesn't matter.” (149)

授業でこの映画を活用するための教師用手引きである *WHALERIDER A Teacher Resource for Class Cinema Viewing* によれば、英語を母語とする生徒の対象学年は５年生から８年生である。また、主人公のカフは１２歳という設定なので、日本の中学生にとってもふさわしいレベルと言えるだろう。*New Crown* は、平成９年度版、平成１４年度版にも「十代の少年少女と動物」が主要な役割を果たす作品を教科書に採用しており、それぞれに感動的な作品であるが、中でも現行版の“The Whale Rider”はすばらしい。教師用解説書に題材のねらいとしてあげられている「人間の成長」「家族の葛藤と愛情」は中学生の発達段階として考えさせたいテーマである

し、ニュージーランドの先住民族であるマオリを取り上げることは、多文化教育の一環としての役割を果たす。そのほかにも少数民族・性差別・伝統の継承の問題なども投げかけることで考えさせることができる。また、前述したように“The Whale Rider”には原作の小説がある。比較的短く平易な文が多いので、教科書の本文に加えてオーセンティックな英文である文学の表現に触れさせることもできる。

筆者の勤務校では、*New Crown* を使用している。２００７年度と２００８年度の３年生の“The Whale Rider”の授業では、DVD で映画を視聴させた。担当教員も授業の方法も違うが、どちらも映画を視聴させるという点は共通していた。以下に、単元の学習終了後の２００７年度の生徒１１８名の感想から代表的なものをあげてみる（わかりにくい表現は筆者が書き直した）。この時は、教科書を１ページずつ読んで内容を理解した後で、そのページに対応するシーンで区切って補足として鑑賞させるという手法をとった。また、自作プリントには教科書本文に対応する部分の原作の文を入れて紹介した。

・映画がなく、教科書だけだったら内容がよくわからなかったと思う。
・（感想を述べた後）このように感じたのは、教科書を基本として原文の紹介や DVD 鑑賞があったからだと思う。
・映画に出てきていないところを原作で読みたいと思った。教科書の英文だけだったら、深みのある物語だとはわからなかったと思う。
・映画を見て、英語で理解できたところがたくさんあった。
・リスニングの練習にもなった。
・いつも吹き替えで映画を見ていたので、字幕読むのは慣れなかったけれど、演じている本人の声を聞くのもいいなと思った。
・伝統の踊りは、表情がすごくて驚いたけれど、こういうのをやる国もあるんだなと思った。

映画を見ることによって、より深い理解が得られたとする生徒は多かった。また、原作を読んでみたいという感想を書いた生徒も予想より多かったのが印象的であった。さらに、映像を通してマオリの文化に触れさせることで、「異質なものを受け入れる」という異文化理解の素地をわずかでも養えたと考える。しかし、肯定的な意見ばかりではない。映画を見ること自体は楽しいが、新出単語や言語材料がしっかり身に付かないのではないかと不安を訴える感想も目立った。これは、「読むこと」に重点をおく教材でありながら、重要な言語材料が含まれていることと、日本語で意味が添えてはあるが新出単語の数が多いことが原因だと思われる。

２００８年度の３年生は筆者の勤務校の同僚教員が授業を行った。「授業中に映画を見ることは、英語学習の役に立つと思いますか」という質問に、「強くそう思う」から「全くそう思わない」の４段階で答え、理由を自由記述で書いてもらった。対象は１２７名である。「強くそう思う」が４９％、「そう思う」が４６％で、合わせると９５％の生徒が肯定的にとらえていた。以下にいくつか代表的な理由をあげる。

・感情のこもった英語が伝わるから。
・リスニングの練習になる。
・目で見なくてはわからないことがわかったから。
・映像化された情報の方が印象に残りやすい。また、なかなか英語音声で見る機会もないから。
・自分の知っている単語が聞こえてくると、うれしくなってもっとないかなとがんばってさがすから。
・英語の意味をわかろうとして見るから。
・楽しく勉強できるし、こういうシーンではこう言うんだなということがわかるから。

「あまりそう思わない」の理由の中には「日本語訳（字幕）にばかり目が行ってしまって、英語の方を全く気にしなくなると思った。映画より音楽の方がいいと思う。」とするものがあった。

生徒の声からわかったことだが、映画をオリジナルの音声で視聴する経験は意外にないようである。やはり、楽しみのためだけに個人で見る映画では、聞いていて楽な母語吹き替えの方を選んでしまうのだろう。学校で行う授業は生徒の学力向上と人間的な成長のためにある。生涯にわたる学習の基礎となるように、動機付けとして有効な教材を工夫して取り入れていきたい。

４．教員養成課程での試み

有効な学習教材である映画を、カリキュラムの中に取り入れて計画的に活用するにはどうしたらいいか。教育課程の基準であり、教科内容が示されている学習指導要領にはどのように記載されているだろうか。現行及び新学習指導要領の第９節外国語を確

認すると、「映画」という文言は一度も使われていない。「第２　各言語の目標及び内容等　英語　３　指導計画の作成と内容の取扱い（１）ク（新版ではキ）」に教育機器の有効活用について触れられているのみである。新学習指導要領の解説には、視聴覚機器を効果的に使うことによって教材を具現化し、生徒の興味関心を高めて自ら学習しようとする態度を育成するということが記載されているが、コンピュータ等の利用については具体的な記述があるが、映画についての言及はない。（参考までに昭和２７年度実施の中学校・高等学校学習指導要領〔試案〕の内容を紹介する。この指導要領は法的拘束力をもたず、教師に対する指導の参考資料的な要素が強いが「第６章　教育課程材料の源とその材料」に「映画」、「第８章　地域の必要に対する学習指導要領の適応」に「外国映画」という項目があり、詳細にその活用方法が示されていて興味深い。）

映画を活用した授業を行うには、その手法や先行実践例を知ることが第一歩である。誰しも経験のないことに踏み出すには多くのエネルギーがいる。壁を少しでも低くするために、映像教材の活用については教員養成課程で模擬授業を経験したり、現職教員の教科教育研修に取り入れたりすることなどが有効であろう。２００８年度、宇都宮大学教育学部の米文学演習Ａでは、中・高の英語教科書の文学的教材の背景知識を学ぶとともに、“The Whale Rider” の DVD を活用した指導案の作成及び模擬授業を行った。指導案の作成は夏季休業中の課題であったが、受講生１９名のうち、DVD を有効に活用した指導案を立てられたのは、わずか５名であった。教育実習を経験していない２年生と、９月に実習を終えたばかりの３年生が多かったこともあり、指導案としての体裁を整えることで精一杯で、ワークシート等の工夫は見られたものの、映像を活用するまでには至らなかったようである。その後、練り直した指導案をもとに、３名の学生が模擬授業を行った。５０分の中に、異文化理解・物語の概要把握・リスニング等が盛り込まれ、効果的に映像を使用して授業を展開しようという意欲が感じられた。映画の全てを見せる時間は当然なかったが、DVD から画像をキャプチャーしたものをスライドで提示して物語のあらすじを把握させる手法は、実際の授業でも活用できるし、リスニング用に選んだシーンも適切であった。このような経験をもとに、映画のみならず、様々な映像教材を授業に取り入れる工夫ができる教員が育っていけばいいと思う。

５．終わりに

筆者は冒頭で、授業において有効に利用できる教書準拠の映像ソフトについて述べたが、すべてのレッスンが収録されているわけではない。「映画を題材としたレッスン」がまさにそれである。著作権法第３０条から第５０条は「著作権の制限」について定めており、ここには著作物等を例外的に無断で利用できる場合について記されている。第３３条は「教科用図書等への掲載」という項目があり、「著作物を教科用図書に掲載する者は、その旨を著作者に通知するとともに、同項の規定の趣旨、著作物の種類及び用途、通常の使用料の額その他の事情を考慮して文化庁長官が毎年定める額の補償金を著作権者に支払わなければならない」としている。このように「教科用図書」には一定の緩和規定があるが、教科書準拠とはいえ「教科用図書ではない」出版会社制作の映像ソフトに、著作権で守られた映画を使用することは簡単ではない。つまり、教科書に掲載されている題材でも、映画の本編を利用したい場合は、別途教員が準備しなければならない場合が多い。また、コンピュータやプロジェクタなど、ハード面での整備も理想とはほど遠い状況にあるし、研修も不足している。

中学校では、平成２４年度から新しい学習指導要領が施行される。今回の学習指導要領の改定は、中央教育審議会の「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について〈答申〉」（２００８年１月１７日）に基づいて行われた。ここには改正教育基本法等で示された教育の基本理念と現在の子どもたちの課題への対応の視点から、基本的な考え方として６つの項目が挙げられている。その中でも重要と見なされている「豊かな心や健やかな体の育成のための指導の充実」(22)に注目したい。このことについて答申では、「自分や他者の感情や思いを表現したり、受け止めたりする語彙や表現力が乏しいことが、他者とのコミュニケーションがとれなかったり、他者との関係において容易にいわゆるキレてしまう一因になっており、これらについての指導の充実が必要である。」(28)としている。優れた視聴覚教材としての映画の特徴を最大限に生かすことは、言語を習得することに資するのみではない。異文化（自分とは違う他者）の存在を

認め、他者の心のひだを感じ自分自身を見つめるための教材として、大変有用なものである。英語教育は学校教育の一環である。教科書の題材をていねいに扱い、しっかりと教材研究をすることで、「今日、学校に来て良かった」と生徒が思うような心を揺さぶる授業をしたいものである。そのためのハード面の整備と研修の充実を望む。

なお、映画を授業に使うにあたっては著作権の問題に注意しなければならない。映画英語教育学会(ATEM)の見解では、教育目的に限っての授業での使用は原則として問題がないということである。学会で『映画ビデオ等を教育に使用する時の著作権ハンドブック』を発行しているので参考にされたい。

参考文献

Ihimaera, Witti. *The Whale Rider*. Orland: Harcourt, Inc., 2003.

Murray, Fiona et al. "WHALE RIDER A Teacher Resource for Class Cinema Viewing."(2002). 1 August 2008. 〈http://www.whaleriderthemovie.com/edudation/wr_resource_kit.pdf〉

Wood, David. J. *Film Communication Theory and Practice in Teaching English as a Foreign Language*. Lewinston/Queenston/Lampeter: The Edwin Mellen Press, 1995.

白畑知彦他『英語教育用語辞典』大修館書店 1999

瀧口優他「特集映画で英語」『英語教育』５６(2007):10-35

著作権問題専門委員会編『映画ビデオ等を教育に使用する時の著作権ハンドブック(改訂版)』映画英語教育学会 2000

*NEW CROWN*編集委員会『Teacher's Manual②解説・活用編』三省堂 2006

Benesse 教育研究開発センター「第4回学習指導基本調査」 http://benesse.jp/berd/center/open/report/shidou_kihon/hon/index.html 2009年3月10日

文部科学省「中学校学習指導要領新旧対照表第9節外国語」 http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/tokushi/tokushi2.pdf 2008年8月1日

文部科学省「中学校学習指導要領解説外国語編」 http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/chukaisetsu/index.htm 2009年3月15日

文部科学省「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について〈答申〉」 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/__icsFiles/afieldfile/2008/12/18/20080117.pdf 2009年3月10日

文部省「学習指導要領外国語科英語編Ⅰ(試案)昭和26年(1951)改訂版」 http://www.nicer.go.jp/guideline/old/s26jhl1/ 2009年3月15日

『クジラの島の少女』(*Whale Rider*) 監督・脚本：ニキ・カーロ 日本ヘラルド映画株式会社 2004

資料(教科書一覧)

(1)昭和５９（１９８４）年度版

TOTAL ENGLISH 中島文雄ほか 秀文出版

NEW EVERYDAY ENGLISH 羽鳥博愛ほか 中教出版

(2)昭和６２（１９８７）年度版

Sunshine English Course 佐藤喬ほか 開隆堂

TOTAL ENGLISH, 中島文雄ほか, 秀文出版。

NEW EVERYDAY ENGLISH 羽鳥博愛ほか中教出版

(3)平成２（１９９０）年度版

SUNSHINE ENGLISH COURSE 佐藤喬ほか 開隆堂

(4)平成５（１９９３）年度版

NEW HORIZON English Course 浅野博ほか 東京書籍

SUNSHINE ENGLISH COURSE 島岡丘ほか 開隆堂

NEW TOTAL English 中島文雄ほか 秀文出版

EVERYDAY ENGLISH 上田明子ほか 中教出版

(5)平成９（１９９７）年度版

NEW CROWN ENGLISH SERIES 森住衛ほか 三省堂

SUNSHINE ENGLISH COURSE 島岡丘ほか 開隆堂

ONE WORLD English Course 佐々木輝雄ほか 教育出版

TOTAL ENGLISH 堀口俊一ほか 秀文出版

EVERYDAY ENGLISH 上田明子ほか 中教出版

(6)平成１４年（２００２）年度版

NEW HORIZON English Course 笠島準一ほか東京書籍

NEW CROWN ENGLISH SERIES 森住衛ほか 三省堂

SUNSHINE ENGLISH COURSE 松畑熙一ほか 開隆堂

ONE WORLD English Course 佐々木輝雄ほか 教育出版

TOTAL ENGLISH 堀口俊一ほか 学校図書

(7)平成１８年（２００６）年度版

NEW CROWN ENGLISH SERIES 高橋貞雄ほか 三省堂

SUNSHINE ENGLISH COURSE 佐野正之他 開隆堂

ONE WORLD English Course 松本茂ほか 教育出版

TOTAL ENGLISH 堀口俊一ほか 学校図書

(本稿の実質的著者は小澤教諭です)